

# 災い転じて福となれ！

(2005.1.5)

JANUARY 

昨年を漢字で表すと「災」であるとの事でした。事実、大雨の後の洪水が各地で相次ぎ、夏には記録的な猛暑が続きました。台風も日本列島を何度も直撃し、本当に天災の多い年でした。このような異常気象は日本だけではなく、世界中で起きています。地球環境を破壊し続ける人間へのしっぺ返しに思えます。もう終わりかとホッとしたのも、つかの間、新潟・中越地震が起きました。そして、年末には、インドネシア・スマトラ島沖地震と大津波による大災害が発生しました。私は、東南アジアとそこに住む人々、その文化が大好きで、被災した地域に何度か行っています。被害の惨さと、これからの生活を思うと胸が痛みました。なにしろ心は豊かでも貧しい地域です。家を、家族を失い、田畑を流され、塩をかぶりこれからどうしたらいいのでしょうか。蒸し暑い地域です。ペストや赤痢も発生しはじめているといわれています。戦争やテロなど、殺し合いなどしている場合ではありません。

学園全体では、取手、龍ヶ崎地区の少子化の影響を受け、取手、北竜台の園児が急減しました。そんな中、年末に、双葉学園に、朗報が届きました。日本児童教育振興財団主催「わたしの保育記録」、特、入選6編の中、なんと半分の3編を双葉学園が占めてしまいました。全国からの応募の中、半分が双葉学園で占めるとは、快挙であると同時に、ふたばの保育のレベルと人材の高さを示したことになる胸を張りました。入選者は、取手の小菅朱里、北竜台の井上綾子、と理事長です。理事長は、先生方に何時も、「記録のない保育は、深まりがない、子どもを深く理解できない。常に記録していれば、保育記録に応募するのは、簡単なこと、みんな、どしどし応募しなさい。」と言っていました。そう言っていると、「自分も、応募すればいいのに」と言う声が、耳に入りました。そこで、初めて応募する羽目になったわけです。私の入選はおまけでしたので、スマトラ沖地震救援へ役立ててもらいました。

本学園で応募した他の先生方の記録を、読んでみましたが、入選作より良いと思える様な物が沢山ありました。自画自賛になりますが、本学園のレベルの高さをあらためて認識すると同時に、これからも自信を持って双葉の理念を邁進して行こうと心に誓いました。地道に、信念を持って努力していけば、社会は必ず認めてくれるでしょう。意味は違いますが、今年はずっと「災い転じて福となる」様な気がします。世界中が、ふたば文化幼稚園のように、平和で、楽しくなりますように。



取手の幼稚園前の土手から、大利根の向うの茜空に富士が・・・。広大な景色を望んで育てば、希有壮大な心が育つ。

# お父さん、主婦業は大変です

(2005.2.1)



昨年の11月末に、絹幼稚園で専業主夫をしている人のお話があった。初めの挨拶の中で、私は深く考えもせず、「子どもが好きな私にとっては、うらやましい身分の人だ。」などと口を滑らしてしまった。主婦業の大変さは十分理解していたが、お話を聞いていくうちに、とんでもない事を言ってしまったと、後悔した。

主婦業、特に主夫業がどんなに大変な仕事か考えずに、「うらやましい」などとほざいてしまった。子どもが好きだから、2~3時間子どもと遊ぶのとは、訳が違う。子どもと遊ぶだけなら、気楽なものだ。赤ちゃんのオムツの始末から、掃除、洗濯、買い物、食事の用意、片付け、24時間休みなしである。夜中でも、子どもは待ってくれない。しかも、毎日、毎日同じ事の繰り返しが365日続くのである。それが、幼い子どもばかり三人にもなったらもうパニック状態である。ウンチを漏らしたのを始末しているうちに、もう一方ではコップの水をこぼし、他方では、お腹をすかして大泣きする。気が狂いそうになる。本当に辛い、幼児虐待の寸前まで行きそうになる。これは、理解していても、実際に体験していないと、真には、分からない。こんなにしんどい仕事なのに、休暇もない、手当もない。主婦の世界は、男の社会みたいに、序列があって単純なものではなく、複雑で分かり難いので気をつかう。結婚すると、名前を変え夫に従う。まるで、レコードのA面の裏に付いてるB面みたいだ。これほど大変な仕事なのに、GDPには出ないばかりか、事故で怪我をしても、休業補償どころか、何の保障もない。日本国中の主婦が、一日でも、家事、育児を放棄してゼネストをしたら、父親は会社を休まなければならない、それこそ日本国中大パニックになる。

それはそうとして、もう、母親だけに子育てを押し付けるいびつな時代は終わりにする時だ。この講演会の2、3日前に、茨城で立て続けに起きた両親殺害事件は、外との関係が遮断され、母と子だけの濃密過ぎる関係の中で、緊張した糸がぷつんと切れてしまう様に起こったことである。母と子だけでなく父親も一緒に、さらに、地域社会を含めて、みんなで子育てする社会にしなければ、子どもはまともに育たない。少子化も止まらない。

このお話を聞いたのは、私以外全てお母さんばかりだった。是非、お父さん方、行政、政治に関わる方々に聞いて欲しいと思った。まずは、本園のお父さんに読ませてみたい。「園長め、余計なことを」と、思うかな。



# もっと子供を抱きしめて下さい

(2005.3.1)



## 【その一】

子どもの頃に、抱きしめられた記憶は、  
ひとのこころの、奥のほうの、大切な場所にずっと残っていく。

そうして、その記憶は、優しさや思いやりの大切さを  
教えてくれたり、ひとりぼっちじゃないんだって思わせてくれたり  
そこから先は行っちゃいけないよって止めてくれたり  
死んじやないくらい切ないときに支えてくれたりする。

子どもをもっと抱きしめてあげて下さい。  
ちっちゃなこころは、いつも手をのばしています。

「幼児虐待防止のために、公共広告機構が出した広告です。」この文章を読んで心が動きました。今月は、この文章をじっくり読んで下さい。コメントはしません。

## 【その二】

自分で言うのもおこがましいのですが、私は最近、とみに包容力ができてきたように思うのです。包容力は、抱擁する力です。私を見ると、子ども達が「抱っこして」と抱きついてくるのです。一人の子を抱っこすると、「私も、私も、」と次から次へ、抱きついてくるのです。抱っこされるのは、とても気持ちがいいのでしょうか。私も気持ちがいいのです。ギューと抱っこすると充電されます。そして、みんなと遊び始めます。一瞬でいいのです。

罪を犯した少年院の子ども達の更生プログラムに、教官との裸になってのぶつかり合いを組み入れたところ、少年達が思いをぶつけない相手を思いながら、汗びっしょりになって、ぶつかり合っていると、「お父一さん」と言って泣きだす子がいるという話を聞いたことを思い出します。小さい時に、もっともっと、お父さんに裸でぶつかり、抱っこしてもらいたかったのでしょうか。

非行少年達を調査研究したところ、親や兄弟、仲間との「スキンシップの不足」は、抑うつや、多動、暴力、攻撃などの感情の障害の原因になることが多いことが分かったといえます。逆に、幼児を実験したところ、スキンシップを多くすると、問題行動のある子どもの、他の子への攻撃や妨害などの望ましくない行動が、統計的にも減少していることが分かりました。

身体記憶はたとえ思い出せなくとも、確実にその痕跡を心に刻んでいます。抱っこされたり、触れ合う体験を多くすると心が満たされます。そして、心も穏やかになって優しくなれるのだと思います。



# 子どもが健全に育つためには

(2005.4.6)



お母さん方からお話を頼まれた際に「どんなテーマが良いでしょう」と尋ねると、“ギョッ”とする答えが返ってきて、当惑したことがある。「子どもが犯罪者にならない様に育てるにはどうしたら良いか」というものでした。誰もが犯罪者になりうる可能性を持っていると考えているから、こういうテーマが出てきたのでしょう。そしてもう一つが「頭の良い子に育てるには、どうしたら良いか」というものでした。このテーマを前にして、私は考え込んでしまいました。

この二つの問題は、相反するテーマのようで、非常に関連することなのです。子どもがもしかすると犯罪者になってしまうのではないかと考えることこそ恐ろしいが、そういう社会になってしまったのかと愕然とします。これだけ、次から次へ青少年の犯罪が多発すれば、「もしかすると家の子も」と心配するのは当然のことでしょう。また競争がここまで過熱すると、自分の子が、落ちこぼれてしまうことを恐れるのも当然です。

非常に興味をひくデータがあります。アメリカの研究者が、同じ町に住む123人の子ども達を、3～4歳時から27歳まで追跡研究したものです。良い保育を受けた子（Aグループ）と、そうでない子（Bグループ）の長期的発達に及ぼした結果を調べました。学習意欲、高等教育進学率、就職率では、Aグループが、Bグループの倍近い良い結果が出ています。反対に、福祉受給率、逮捕歴では、Bグループの方が倍以上多くなっていました。

しかし、重要な事はその保育の「質」でした。調査の結果、親の学歴、家庭環境で、求める保育の「質」に違いが出ています。大きな違いは、知的発達の面より、感情や人と関わる力を重要視していることです。乳幼児期に育つ大事な力は、自信、意欲、対人関係、自己コントロール能力等です。小さいうちから、一つの人格として認められ、命令、強制されて従うのではなく、理解され、感情やプライドを尊重され、会話を楽しみスキンシップを含むコミュニケーションが充分にあり、友達との自然な交流の中で、葛藤、対立を経て自分をコントロールし、調整する力をつけ、失敗しても励まされ、勇気を奮い起こすことでやる気・意欲を育てます。そういう力が本物の「知、力を育てていくこと」になります。

紙面の関係で詳しくは述べられませんが、事件を犯した子の母子関係は、一様に濃密で、管理的・専制的でした。抑え付けられて育った子の幼少期は従順でおとなしく、大人にとって扱いやすい子だったといえます。こんなところにテーマのヒントがあるような気がします。



# 優柔不断な子どもを育てよう

(2005.5.2)



世間では優柔不断というのは馬鹿にされる。早い決断こそが素晴らしいと賞賛されているが、あれやこれや思いを巡らし、丁寧に考えるのは決して悪いことではない。思慮深く、慎重で、人間的な営みなのである。思えば、子どもはみんな優柔不断である。お菓子ひとつ決めるのにも、あれこれ迷う。何をするにつけ考える。即断即決という訳にはいかない。**幼少年期に、あれやこれや思いを巡らし考えることが、思考力を高め、思慮深い人間にする。優柔不断は、悪い事ではない。**特に、幼少年期には。そして、別の意味でも、悪いことではないと思う。

十年ほど前、本園は給食をやっていたなかった。給食の実施を求めるお母さんの声が、次第に増してきた。そこで、給食を実施するか否か意見を聞くことにした。賛否入り乱れ、喧々囂々となった。何度かの討論の後、「園長先生の考えはどうなのか。」と質された。私は、「基本的には、お母さん手作りのお弁当が良いと思うが、働くお母さんが増えていることと、核家族化してお母さん一人に掛かる負担が重くなっていることを思うと、そうは言っていない。」と答えた。すると、お母さんの中から「意見など聞かず、園長先生の考えどおりにやればいいのに、だいたい園長先生は優柔不断よ。」とお叱りを受けた。最終的には、園長の決断に掛かるとしても、沢山の意見を聞き、より良い結論に達することは、民主的で良いことだと思っていたので、少々ガックリした。ガックリしながら考えた。

**優柔不断を文字どおりに捉えてみると、なかなか良い言葉であると思える。優しく、しなやかで、簡単には切れない。**「優」は、人を憂いと書く。人の立場に立って人のことを思うことである。やさしいことである。「柔」は、しなやかで柔軟なことだ。柳のように、嵐がきてもポキリと折れないしなやかさだ。近頃はちょっとした困難に遭うとすぐにポキリと折れてしまう人が多い。本当の強さは、鋼のようなしなやかな強靭さである。困難に遭っても、堪えることのできるバネのような心と体を持った人である。「不断」は簡単に切れないということ。嫌なことにも耐えられること。我慢、忍耐できる事である。すぐにカッと「頭にきて」、プツンと切れてしまうのではなく、腹、臍下丹田で、グッと堪えて我慢できることだ。そういう人は、腹の据わった、太っ腹な人である。子ども達がそういう人間になることを望んでいる。

保護者の皆さんに、「どういう人間に育てて欲しいですか？」と尋ねると、数十年前からその答えは変わっていない。「**健康で、やさしい人**」というのが、圧倒的多数である。



## 「5月の子ども達の姿」

5月の連休が終わる頃になると、子ども達一人一人の地が出てきます。あちらこちらでトラブルが続発します。他人との関係があるからこそ、幼稚園は子ども達が初めて出会う「**小さな社会**」なのです。人間は、他人との関係の中でしか、人格を育てられません。**この小さな社会の中で、衝突し、葛藤し、社会性、自己抑制など、人間としての人格の基礎を身につけます。**

最近、少子化社会の中で、子ども同士で遊ぶ機会が少なくなりました。いつも、お母さんに見守られていて、衝突する時はほとんど止められてしまいます。又、お母さんと2人きりの時は、殆どの事が許されてしまいます。初めて自分一人で他の子と遊ぶ時に、どの様に他の子に接してよいか分からず、急に友人を突き飛ばしたり、噛み付いたりする子もいます。他の子が使っているスコップを、いきなりひったくったりすることもあります。勿論、集団生活の中では、そんなことは許されません。家ではいつも自分が一番であったのに、幼稚園では並んで順番を待たなければなりません。家では、やりたい放題であっても、幼稚園ではそれを許してくれない他人がいます。そこで衝突が起こります。**家庭ではできない人との関わりがあることにこそ、幼稚園の存在意義があると言えます。**

自分の思い通りにいけなくなり、幼稚園が窮屈になってきます。一人一人の子どもが、みんなそれぞれ壁にぶつかり、もがき、それを乗り越えようとしています。幼稚園に行きたくないと言い出したり、**友達と衝突したりする事は、実は、みんな一歩前進なのです。成長の`証し、なのです。**子ども達同士の自己主張のぶつかり合いの`ケンカ、は、他人にも主張があること、他人との関係、やって良い事と悪い事があること、人との折り合いの付け方を学ぶ貴重な機会です。そこから、他人の立場を思いやる事が出来る様になるのです。お母さんはうらたえず、どっしりと構え、じっくり見守り、みんな受け入れ、共感し、抱きしめ、愛情を充電し、心を安定させてあげてください。

しかし、一方的な暴力であったり、弱い子を攻撃することは、自己主張のぶつかり合いとしての“ケンカ”ではありませんので、決して許しません。その場で厳しく指導します。人に対し、やってはいけないこと（悪い事）を教えます。**幼稚園は一人一人を優しく見守ると同時に、人間としてのルールを身につける場でもあるのです。**

従って、小さなトラブルはいちいち双方のご家庭に報告しません。幼稚園で起こった子ども同士のことは、幼稚園の全面的責任ですが、一方的な暴力であったり、一方を傷つけてしまったりした時は、双方のご家庭に報告するように致します。

半年もすると、すっかり落ち着きます。今はアウトローの世界も、**子ども達の法（ルール）が支配する「しっかりした小さな社会」になります。**ご心配をお掛けして申し訳ありませんが、子ども達の成長を楽しみに待って下さい。



## 男女共同参画社会

(2005.6.1)



取手の幼稚園で小運動会がありました。五月は県・市町村への提出書類が多く、会議、監査、総会が続き少々疲れ気味でしたので、出かけるのが辛かったです。しかし、出かけないのは、一無、二少、三多（禁煙、少酒・食、多い運動・多休・多接—たくさんの人、物、事に会う。）を信条にしている私の信念に反します。そういう訳で、元気に出かけました。会は、天気にも恵まれ、輝くような五月の澄んだ青空と風の中、実に楽しく和気あいあいと進行しました。はじめの言葉で、子どもとそのお父さんが、前に出て、一言づつ挨拶（掛け声）をしました。お父さん達は、「がんばるぞ、おー！」「ハッスル、ハッスル」とアドリブで皆に声を掛けました。その言葉どおり、お父さんたちは、こちらが心配するほどの大ハッスルでした。

全種目が終わり、閉会の前に、皆でお弁当を食べる会がありました。どこまでも続く土手は、綺麗に刈られ、気持ちよいほどに広々と広がっていました。そこに、シートを広げ、お弁当を食べました。私も、仲間に入れてもらい、たくましいお父さんと美人のお母さんと三人の子どもの一家と話をしました。すると、お母さんが、お父さんに目をやりながら「先生、この人が今育児休暇をとって子ども達の養育と家事をやっているのです」と、言いました。お父さんはにっこり笑いながら、「思っていたより大変です」と、言いました。他のシートでは、「今日のお弁当は、オレが作ったんだ！」と、言うお父さんもいました。

私は、こんな家族って素適だな、と思いつつ、昨年オランダで見た光景を思い出しました。平日の昼時、それぞれのベビーカーの赤ちゃんを見守りながら、レストランでジョッキを傾け、ランチをとっている二人の大男が、実に自然な姿に見えました。

私は某市の男女共同参画社会推進条例の作定に関わりました。その中で、社会のリーダーシップを取るべき人々が、いかに保守的で頑迷であるかを感じました。しかし、一般社会の`若い民、の意識の方が、さっさと先を行っているのです。急激な少子高齢化社会の中では、これまでの男女の分業による単一的価値観から脱却しないと、日本は再生しないと思います。今までの固い社会通念にとらわれず、自分の生き方を自由を選択して、能力を十分に発揮できる社会を、そのためには、年齢、性別にとらわれず、人々の多様性を生かさなければなりません。もう、男だから、女だからと言う時代は終わって、人間として一人一人が大切にされなければならないと思います。

5/31発表 2004年度 **出生率1.29** 4年連続過去最低更新



## 早寝・早起の勧め

(2005.7.1)



入園説明会の折り、保護者の皆様に一つだけお願いしていることがあります。それは、「早寝・早起き」です。朝は早く起き、日中、十分に活動し、お風呂に入り、ゆったりとした気分で眠りにつき、ぐっすりと眠るといった、規則正しい生活のリズムをしっかりとさせることです。

赤ちゃんの時には、昼夜の区別がなく、眠ったり起きたりしていたのが、次第に、人間としての生活のリズムを作り、心と体を発達させていきます。昔から「寝る子は育つ」と言われてきました。これは、成長・発達の真理をついた言葉です。幼児期は、十時間以上、ぐっすりと眠る必要があります。しかし、現代社会と若い両親は、子ども達を眠らせません。都会では夜中と昼間の区別がありません。一日たっぷり遊べば、八時か九時には眠りにつきます。しかし、深夜のファミレス、カラオケボックスに幼児を連れた家族連れが目立ちます。遅い日は深夜まで起きていることがあります。すると、翌日は生活のリズムが乱れ、一日ボーッとして、夜になってから体温が上がり、脳が活動し眠れなくなります。現代っ子は、睡眠時間が短くなっています。そして、低体温になっています。

人間の体は、太陽の光に合わせて活動します。朝起きて、ゆっくりと食事を摂り、排便し、幼稚園に行く頃には活動し始め、体温も上昇してきます。夕食前の三時から五時頃にピークを迎えます。この時間帯の子ども達の姿は、活動的で実に楽しそうです。そして、お風呂に入り夕食を済まし、段々と体温が低下し、ぐっすりと眠りに着く、というリズムが子どもの生活です。しかし、夜が遅いと、朝はまだ眠りの状態にあるのに起こされてしまいます。脳も体も、ウォーミングアップができていません。食事も進みません。排便も心地よくできません。そして、体温のピークは、夜八時以降になるので、脳も活動的になって快眠できません。

生活のリズムが狂うと、背筋の通ったピリッとした人間には育ちません。規範意識も育ちません。人が崩れる時、必ず生活のリズムが崩れます。非行少年や引きこもりの子ども達は、大体昼夜が逆転しています。心と体の健康の第一は、「早寝・早起き」です。





# 子ども達の最善の利益

(2005.8.1)



昨今、「子育て支援」と称して、保護者の利便ばかりが声高になっていまいか。自分自身の反省も込めて言うなら、私達は知らず知らず、いつの間にか子ども達の利益より、大人、特に母親の利益を優先してしまうことがあったかも知れない。私達は「子ども達の最善の利益」を優先していかなければならない。家庭と地域社会と幼稚園は、はっきりと役割分担をして、その責任を果たしていかなければならない。

子ども達の世界に起こっている近年のおかしな現象は、子ども達から自然体験、多様な人間関係のある生活体験が奪われていった頃から起こってきた。戸外で異年齢の子ども達が群れて遊ぶ姿もなくなって、子ども達は室内に閉じこもるようになった。

幼児教育は、未来の社会を担う子ども達の基礎となる教育である。しっかりとした社会人になるための根っ子の教育である。根っ子は、目に見えないからやっかいである。保護者に目に見える形で説明できないから説得力に欠ける。しかし、ここを説得しなければならない。

幼児期はまず親子の関係が大切である。愛情に満ちた大人との信頼関係がしっかりとできると、人に対する信頼が生まれ、社会性の基礎となる。これを「原信頼」と言って、生涯失われることのない人間への信頼ができる。そして、心が安定すると、外に向かって活動的になり、たくさんの人との関わりを持ち、他者との共感、衝突を繰り返す中で、社会力が育つ。この「育ち」こそ、最も重要だ。どうしたら他人とうまくやっていけるか学び、人といふことの楽しさを知り、ここから他者との関わりが広がり、人間としての能力が高まる。

アリストテレスが、人間は「社会的動物」であると言っている。人間から社会性が欠けてしまうとただの動物であり、社会が成り立たなくなってしまう。他の動物と人間の脳が決定的に違うところは、前頭連合野の部分である。いくらチンパンジーの脳が大きくとも、この部分が決定的に違うそうである。社会性を掌るのが前頭連合野である。この前頭連合野をザックリ切り落とすような環境に、子ども達を追い込んでいなかったらどうか。

幼児期の教育は、常に子ども達を中心にとらえていかなければならない。私達が子ども達から奪っていったものを、今、返していかなければ取り返しがつかない社会になってしまう。幼児期には、幼児期にふさわしい生活をさせなければならない。多様な人間関係の中で、楽しい生活を送らせなければならない。



# ころんで、ころんで子どもは育つ！

(2005.9.1)



幼児教育は、**環境**を通して行われると申します。そして、**幼児期にふさわしい生活が展開されること、遊びを中心とする総合的な指導が行われるようにすること、一人一人の特性に応じた指導が行われること**、を特に重視しなければなりません。しかし、現代の子ども達には、自然環境は勿論のこと、幼児期にふさわしい生活環境が少なくなっています。

ふたば文化幼稚園は、子ども達の「**遊び**」を大切にしています。子ども達の「**遊び**」は、**人間の基礎（根っ子）**となるものを身につける**最も大切な学習**なのです。子ども達は遊びの中で、仲間と共感したり、衝突したり、葛藤しながら、どうしたら人とうまく関わっていけるか、といった人と関わる力、仲間とスムーズに生活するための厳しいルールを作り、それを守っていく社会力を育てていきます。そして、遊びを工夫したりしながら、想像性や創造する力を身につけていきます。活発に活動する中で体力もついていきます。

当然のことですが、**活発に活動すればケガはつきものです。ひざ小僧の擦り傷は子どもの勲章**です。子どもはころんで、ころんで、ころばずに歩けるようになります。そして、歩けるようになると、又、ころんで、ころんで走れるようになり、体の調整力をつけ、脳を発達させます。小さなケガをもさせないようにするには、外で思い切り体を動かすなど、もっての外で、室内でじっとさせているしかないのです。

本園では念のため、学校健康会の保険の他に、園児傷害賠償保険にも入って二重にカバーしています。大きなケガは絶対に起こさないように、常に安全点検を行い、細心の注意を払っています。どうか、子ども達を自由に、思い切り遊ばせて下さい。そして、大いにころんでひざ小僧にバンソウコウの勲章をつけてあげて下さい。



## 自然の中で

(2005.10.1)



子ども達が失ったものの中で、特に大きなこととして、自然体験、生活体験が挙げられる。自然との触れ合いはなくなり、戸外遊びも少なくなっている。室内に閉じこもり、テレビを観たりゲームをしたりすることが多くなっている。

まだ夏の暑さが少し残ってはいたが、真っ青な空の秋晴れの日、取手に用事があって出かけた。少し早目に出て、取手の幼稚園に寄って行こうと思った。どうせなら、子ども達と遊ぼうとトレパン姿で出かけた。玄関を素通りして園庭に廻ると、子ども達が広々と園庭に続く土手まで一杯に使って、思い思いの遊びに興じていた。園庭ではサッカー、リレー、鬼ごっこ、縄跳び、アスレチック、砂場、鉄棒。土手では長いダンボールを使ってのスベリ台など。数えきれない程の自由な遊びをしていた。

土手中段で、数人の子が「ジジチョウセンセイー（本人は理事長先生と言っているのだろうが、私にはジジイチョウと聞こえた）オハヨウゴザイマス。コレ、スゴイダロウ！」と誇らしげに大きなトノサマバッタを私の目の前に突き出した。私が大げさに驚いてみせると、みんなが競うように、首からブラ下げた特性のペットボトルの虫カゴから、しょうりょうバッタ、イナゴ、チョウ、トンボと次々に出して自慢していた。土手スベリでは、年少さんはオシリをつけて滑っているのに、年長さんになると、普通の滑り方では飽きたらず、腹ばいになったり、後ろ向きになったりして、いろんなパフォーマンスでスリルを楽しんでいた。

草いきれのする程の濃い緑の中に、あざみや野菊が咲いていた。この豊かな自然の中で、耳に響く子供達の歓声が、まさに歓び（よろこび）の声に聞こえた。土手に登ると360度、ぐるりと大利根の雄大な自然の中にいる。南の土手に目をやると、彼岸花が真っ赤に燃えていた。ススキをゆらし吹く川風が、汗をかいた体に心地良い。

帰り際に後ろを振り返ると、歓声は届いてこなかったけど子ども達の遊んでいる姿が見えた。そして、「次郎物語」のラストシーンが浮かんで来た（旧制中学生になった次郎が、故郷に帰って来て、遠く、土手で遊んでいる子ども達を眺めているシーンである）。子どもの時代は、自然の中で、自由に、伸び伸びと育てないと大きな人間に育たないと語っているような情景である。ずっと昔から言われてきたことである。殺伐とした鉄とコンクリートの中では、豊かな心は育たない。雄大な自然の中でなければ、伸び伸びとした広い心は育たない、昂然の気は育たない。

### <蛇足>

下妻は多賀谷城址公園に面し、取手は大利根の土手、北竜台は若柴城址の森の中、絹は鬼怒川のほとりの雑木林の中にあります。双葉学園の各幼稚園は、それぞれロケーションは違いますが、変化に富んだ恵まれた自然環境の中にあります。



土手すべり



アスレチック



ジャングルジム



リレーの練習

# 大地に根をはれ ふたばっ子

(2005.11.1)

NOVEMBER 

十月は、まるで梅雨の様に秋の長雨が続きました。お陰で絹幼稚園以外は、運動会の実施が危ぶまれハラハラさせられましたが、どこの園もとても楽しくできました。

本園のメインは、なんと言っても年長児全員による「大地おどり」（下妻・絹は「ソーラン節」）と、年長児全員によるリレーです。今までも、転居のため途中退園した後、この舞をやらせてあげたいと、お父さんだけ先に転居させ、お母さんと子どもだけ運動会が終わるまで残っていたという人や、転居後わざわざ関西から朝一番の新幹線で、「大地おどり」を踊るために駆け付けて来る人がいました。北竜台の幼稚園では、「大地おどり」の途中で雨が降ってきてしまいましたが、子ども達は、雨にも動ぜず、ビシッと決めてくれました。

「大地おどり」は、本園の教育理念を具現化したおどりです。運動会のシーズンになると、毎年新しい集団演技を子ども達が行っていました。毎年違うので、教える方も教えられる方も大変でした。そこで、毎年新たに練習しなくともできる「伝統の踊り」を創れば、年少児の時から見よう見真似でできるようになる、と考えました。そんな折に、全国巡演している民族舞踊団の振付師に、**本園の教育理念「たくましく 大地に根をはれ ふたばっ子」と、子ども達が遊びを中心とした幼児期にふさわしい生活の中で、大地にしっかりと根を張った大樹のように大空にすくすくと伸び、たくましく成長していくことを願った根っ子の教育を教育目標にしていること等**を話し、それを踊りとして表現してもらったものです。

大地をどんと踏む姿は、「ヤーッ」と気合を込めて、まことに可憐で自信と意欲に満ち溢れ、私達大人を励まし鼓舞してくれます。感動に涙さえ浮かせる人が大勢います。運動会が終わると、秋も深まって参ります。**本園はどこの幼稚園も、豊かな自然に囲まれています。子ども達と秋の自然の中に染まって、伸び伸びと過ごしていきます。**



【大地おどり】





土手すべり



アスレチック



ジャングルジム



リレーの練習

# 水をやりすぎた木は枯れる

(2005.12.1)



先日、プランターにチューリップの球根とパンジーを植えながら、数年前のことを思い出しました。その年は、一月中旬になると、急に寒くなって雪が降ったりしました。12月に植えたプランターを、ビニールハウスの中にしまい込もうとしましたが、半数のプランターしか入れることができませんでした。仕方がなく、残りの半分は外に出したままにしました。雪をかぶったパンジーは、さすがにしおれてしまいました。ビニールハウスのパンジーは、厳しい冬の間も花をつけていました。そして、3月になるとチューリップまで咲き始めました。そして、すぐに散ってしまいました。しかし、外に出していたパンジーも、少しずつ元気になり、どんどん花を咲かせ始め、5月頃には、ビニールハウスの花よりも花をどんどん咲かせ、しっかりして大きく育っていきました。チューリップもビニールハウスのものに比べ、莖も太くしっかりとしていました。そして、外に出していたパンジーは、暑い夏の間も咲き続け、秋の頃まで楽しませてくれました。

人間も同じだと思いました。温室の中で、いつも水やり、温かく保護され続けるとダメになってしまいます。幼稚園の時は、いつも親から離さず、いくつも習い事をさせたり、付きっきりで溺愛していた子が、中学・高校以降に急に切れてしまうことがあります。自分で立って歩かなければならなくなった時に、立てなくなってしまうのです。小学校位までは、親の庇護の中に居れば済み、成績もそこそこ良い子が、不登校になったり、家庭内暴力になったり、いわゆる進学校や有名校に入ったのにドロップアウトしてしまったりすることがあります。私は、そんな例をいくつも見て来ました。

ただ、可愛い可愛いと、ペットのように子どもを扱い、自立の芽が出始めた時に、芽をつんだり、自分で伸びる力を抑えてしまうことになるのでしょうか。本当に子どものためにやっているのではなく、大人の自己満足のために、子どもをペット扱いして、従順に寝たり、自分の思い通りにしているだけだったのではないのでしょうか。本当の愛情は、その子が、将来立派な社会人として、自立して、豊かな人生を送れるように育てることです。

